



夜



sanukisoba

100回目くらいの寝返りをうって、私は寝るのをようやく諦める。

寝付けないのは今週でもう4回目。大学生という時間に都合のつく、そして体力をあまり必要としない生活だからなんとかもっているけれど、少しでも忙しくなったらあっという間に倒れてしまいそう。私は眠れない夜が増えていくのと引き換えに、少しずつ元気を失っている。精神的にも、肉体的にも。

ベッドの上で身を起こし、右手にあるカーテンを少し引き、軽くため息をつく。満月を間近に控え、欠けていく哀しみを知らない月はとても明るく、そしてその明るさに耐えかねたかのように夜空全体までもが明るさに満ちている。よくもまあこんな明るい夜にみんなは眠れるものだ、と一部屋も明かりがともっていない向かいのアパートに悪態をつく。

電気スタンドにスイッチを入れて、寝しなに枕元に放り投げた文庫本を手に取り、枕をクッションにしてヘッドボードにもたれかかる。特に読みたいわけでもなかったけど、大学の売店で「売り上げ1位」と平積みになっていたからついでに買ってしまった恋愛モノの小説。午前3時に話し相手もなく1人で眠れない夜をベッドサイドのスタンドで本を読みながら過ごすような女には向いてないんじゃないのかなと思い始めた途端急に読む気がうせてしまい、再び放り投げた。

物語はちょうど、恋人の男が既婚女性とホテルから出てくるところを女が見かけてしまふところだった。よくある話なのかもしれないけれど、たぶんきっと、世の中ってそんなにドラマチックじゃない。だって今の私を見ればそれくらいわかるじゃない。

ぼんやり外を見やりながら明日は3限からだから寝坊しても大丈夫だな、とかトイレトペーパーそろそろ買いに行かないといけない、そういえばいい加減布巾も買いに行かないと、とかそんなことを考え始めたらますます眠気は姿を隠し、仕方なく私はベッドを降りた。

何も敷いていないフローリングの床は春先ではまだ冷たく、床の冷たさは背中をたどって髪の毛の先まで伝わってくる。さむいさむい、とつぶやきベッドの足元に丸めておいたブランケットを羽織り暖房のスイッチを入れる。ここに越してくるとき母は何度も何度も絨毯を敷けと主張していたけれど今更その意味がわかる。でも、敷く気はない。掃除が面倒なもの。

ブランケットを高く誇示するかのようによく伸びをしてから猫背になりながら机のうえの電気ポットを手取る。水を入れ、スイッチを入れてお湯を沸かす。その間にパソコンを立ち上げ、パソコンが立ち上がるまでの間にカップにインスタントコーヒーをカップにいれる。パソコンが立ち上がりDVDをセット、再生が始まるまでの間に手早くコーヒーを入れる。

「合間を縫って動く女」というとやり手の丸の内OLっぽくて聞こえだけはいいな、なんて考えてちょっと馬鹿らしくなる。実際に私がこうやって機敏に動けるのはこういうときくらいだけ。むしろいつも手際が悪くて悲しい。

入れすぎたお湯をこぼさないように気をつけながら椅子に座り、パソコンの画面に見入る。大好きなアニメ。小さい頃は何度も何度も見ていたけれど、高校、大学と少しずつ大人に近づいてい

くにつれて段々とする機会が減っていった映画。

1週間くらい前に立ち寄ったCDショップで見かけて、値段も見ずに思わず手にとってしまいレジで驚愕したDVDを、今日初めて見ることにした理由は自分でもよくわからない。しかもこんな時間に。

修行のために家を出た魔女が、修行先の町で魔力を失い地面を歩いて人に会いに行く、そんな映画。人の冷たさや優しさを知り、町で知り合った男の友達を助きたいその一心で再び飛ぶことを思い出す、そんな映画。何度も何度も見てストーリーもセリフも覚えているのに、私はせっかく入れたコーヒーすらも忘れ画面に見入っていた。

この映画を最後に見たのはいつだろう？あの頃はまだ私も実家にいたはずだ。あの頃は眠れない夜に悩むことなんてなかった。今みたいに1人で映画を見ることもなかった。この映画を見てこんなに哀しい気持ちになることもなかった。

「小さい頃は神様がいて」

エンドロールでそんな歌い出しの曲が流れ始めたとき、私の頬を一粒の涙がつた。そうだ。あの頃はまだ、私の夢をかなえてくれる神様がいた。

今は、もう、神様が見えなくなっている。飛べない魔女と同じだ。

優しい気持ちで目覚めようにも眠ることすらできない私は、少しだけ引いたカーテンから日差しが漏れてくるころ、号泣していた。